



©Hikaru Hoshi

第179回定期演奏会

2020年11月20日(金) 18:00開場 19:00開演
三井住友海上しらかわホール

指揮/角田鋼亮(当団常任指揮者)
ヴァイオリン/島田真千子(当団ソロコンサートマスター)
ヴァイオリン奏者は当初出演を予定しておりましたベンジャミン・ペイルマンより変更になりました。

- ・ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲第1番ト短調Op.26
- ・R・シュトラウス：組曲「町人貴族」Op.60,TrV228c

ホールで体感する、生演奏ならばこそそのオーケストラ・サウンド……。その魅力をもっと深く・細やかに味わっていただくチャンスとなるのが、今季の定期演奏会のラインナップです。——あまり大きすぎない編成の作品で、室内乐的で緊密なアンサンブルを磨き込む。それに加えて、ふだんあまり演奏されない(しかしそれがもったいなく思えるほどの!)傑作にもチャレンジすることで、音楽の豊かさをより広げてゆききっかけになること。

今回・第175回定期では、イタリアにまつわる朗らかな作品たちをお楽しみいただきますが、次の第179回(11月20日)は北へアルプスを越えて、ドイツの名曲をふたつ。のびやかな歌心に溢れたブルッフの美しい(大人気の)協奏曲と、オーケストラの緻密な華やかさをたっぷり味わえるR・シュトラウスの(なかなか実演で聴けない)傑作をお届けします。

◆甘美な歌に魅入られる傑作 —— ブルッフ〈ヴァイオリン協奏曲第1番〉

ドイツには古くから、〈ローレイ伝説〉と呼ばれる、不思議な水の精のお話があります。

恋人の心変わりに絶望し、ライン川の流に身を投げた乙女。彼女は水の精となり、急流を見下ろす岩山のうえで妖しい歌をうたうと、その声に魅入られた舟人たちは流れの渦へと巻き込まれてしまう……といったお話ですが、詩人ハイネをはじめ、多くの芸術家たちに靈感を与えた伝説でもあります。

その〈ローレイ伝説〉の舞台となったのは、ドイツ西部、モーゼル川とライン川とが出逢う街・コブレンツの近く。美しい観光地でもあります。この歴史ある街で生まれたクラシック音楽の傑作が、ロマン派のコンチェルトで最も人気ある作品のひとつ、ブルッフの〈ヴァイオリン協奏曲第1番 ト短調〉です。

作曲家自身が「メロディは音楽の魂であり、それを良く歌い得るのはヴァイオリン……」と述べたのも納得できるほど、独奏ヴァイオリンから溢れ出る歌心の豊かさにうたれる名作ですが、作曲家マックス・ブルッフ(1838～1920)がこの曲を書いたのは、彼がコブレンツ宮廷で音楽監督を務めていた20歳代後半のこと。——ドイツ・ロマン派の詩人たちは魅了したローレイ伝説の幻想、その薫りもたちこめる風光明媚な土地で、音楽家としてのキャリアを歩みはじめた青年の覇気もみなぎるコンチェルトは、緩急の起伏もじつに巧み。劇的な勢いの中にも、力強さと優しい表現とが巧みに織り合わされて、聴き手をひきこんでゆきます。

緩徐楽章でヴァイオリン独奏が魅せる、深くもの思いにふけるような、甘やかで美しい歌。はたまた、溢れだす情熱に身をまかせるような昂揚……。終楽章で、中欧ハンガリー風の色彩もまじえながら、生き生きと華やかにひらがる音楽の喜び!

世界に愛されてやまない人気ぶりが納得ですが、次回定期では、セントラル愛知交響楽団の誇るソロコンサートマスター、島田真千子がこの傑作のソロをつとめます。

東京藝大を経て、ドイツはデトモルト音大大学院で学んだのち、6年間ドイツを拠点にヨーロッパ各地で活躍を広げたという経験を持つ優れたヴァイオリニストですから、ブルッフ作品を生んだ風土、あの空気感を直に呼吸して音楽を磨いてきた人ならではの深い思い入れ……も響くのではないのでしょうか。気心知れたセントラル愛知交響楽団の仲間たちとのコンチェルト共演、という(客演ソリストとの素敵な丁々発止ともまた異なる)信頼こそがひらく表現の大空にも期待です。

◆モリエールの傑作喜劇、その愉しさを音楽で語り尽くす —— 《町人貴族》

そして次回コンサートの後半は、ドイツ・オペラ最大の作曲家でもあるリヒャルト・シュトラウス(1864～1949)が、劇音楽から編んだ組曲《町人貴族》です。

原作は17世紀フランスの劇作家モリエールの傑作戯曲『町人貴族』。これを、フーゴー・フォン・ホーフマンスタール(R・シュトラウスとコンビを組んでオペラ台本を書き、数々の傑作を生んだ大家)が自由に翻案した舞台に、劇音楽として作曲されたのが、次回お聴きいただく組曲のもと。

しかもこの舞台、なかなか野心的な試みでした。劇団による《町人貴族》上演に続いて、劇中劇としてオペラ《ナクソス島のアリアドネ》が上演される……という〈演劇+オペラ〉だったのですが、いろいろ事情あって初演はうまくいかず。作曲家と台本作家は大いに反省して、ふたつを切り離してつくり直します。

かくして、コンサート用に9曲を編んだ組曲《町人貴族》と、オペラ《ナクソス島のアリアドネ》が、それぞれ改作のち完成。どちらも、素晴らしい傑作となりました。

この初演から改作までの事情もとても面白いので、ご興味あるかたは、簡便にして記述ゆたかな岡田暁生『作曲家◎人と作品 リヒャルト・シュトラウス』[音楽之友社、2014年]や、作曲家と台本作家の細かいやりとりを追って創作の秘密に迫ることのできる、ヴィリー・シュー編/中島悠爾訳『リヒャルト・シュトラウス ホーフマンスタール往復書簡全集』[音楽之友社、2000年]をお読みいただければと思います。

モリエール『町人貴族』のほうは、長年親しまれてきた鈴木力衛訳(岩波文庫版[1955年/2008年改版]、中央公論社版『モリエール全集第3巻』[1973年])をはじめ、『モリエール全集 第8巻』[臨川書店、2001年]など最近の訳のほか、電子書籍でも出版されています。

◆生き生きと明るく、そして華やかに!

モリエール原作の戯曲は、皮肉と笑いがテンポ良く交差する愉しい喜劇です。——大金持ちになった成り上がりの町人・ジュールダンは、どうにか自分も貴族の仲間入りをしたい……と、ダンスや音楽、剣術のレッスンを挑んではボロを出しています。それでも懲りずに、娘は貴族でないと嫁にやらん!とゴネ出す始末。そんな彼が、なんとか恋人と結婚したい娘リュシールや、ジュールダンやお金を巻き上げる貧乏貴族、といった周りの人たちと繰り広げる、てんやわんやのドタバタ騒ぎ……。

そんなお芝居につけられた音楽ですから、なにしろ生き生きと明るくて表情豊かな組曲なのです。敢えてオーケストラの楽器編成も小さめにして、古典的で明快なサウンドをつくっているのですが、そのなかにも(それまで《ばらの騎士》などのスケール大きなオペラで培われてきた)精緻で豪華な響き、その薫りもどこかに感じられるような筆致は、さすがリヒャルト・シュトラウス。フルコースではないけれど、気軽に楽しめてしっかり美味しい……という作品、と言えましょうか。

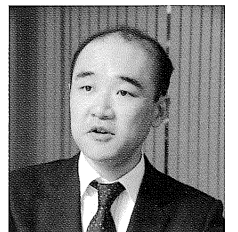
なんとまあ愉しい音楽!と聴くたびに笑みがこぼれてしまう作品であると同時に、オーケストラにとってはなかなかの試練、という心にくい曲でもあります。室内オーケストラ編成のなかに創意工夫を詰め込んでいるため、なにしろ演奏が難しいのです。

細かく分けられた弦楽セクション、そのアンサンブルの妙技は全員に高い音楽性を要求するものですし、ヴァイオリンやトランペットをはじめ、華やかな独奏も聴かせどころ満載。オーケストラ全員が達者でないと、演奏が成り立たないのです。

コンサートであまり取り上げられない理由も、このあたりかな……と想像するのですが、こういう作品でこそ、セントラル愛知交響楽団の全員が持つ豊かな音楽性とチャレンジ精神、親密なアンサンブルの魅力を発揮できようというもの。楽団との絆をいよいよ強める常任指揮者・角田鋼亮と共に、この「愉しくも至難な」傑作へ挑戦する次回定期、これは聴き逃せません。ぜひ次回もホールでお逢いいたしましょう!

やまの たけひろ 山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんば》司会・構成。



Profile